

## 国際シンポジウム「5歳を超えて豊かないのちを」報告書



主催：特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン  
後援：外務省、国連児童基金（ユニセフ）東京事務所  
国際協力 NGO センター（JANIC）  
賛同：動く→動かす（GCAP Japan）

日時：2009年11月6日（金）13:30～16:30  
場所：国立オリンピック記念青少年総合センター  
国際交流棟 国際会議室

特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン（以下、WVJ）は、2009年11月6日（金）、世界こどもの日/「子どもの権利条約」20周年記念として、シンポジウム「5歳を超えて豊かないのちを」を開催しました。一般の皆さま、報道関係者、援助関係者など約90名の方が、基調講演、発表、パネルディスカッションと3時間にわたるプログラムに時おりうなずいたり、メモをとったりされながら、参加されました。以下に、当日の内容を報告します。

### 【第1部】



#### 【WVJ 片山事務局長挨拶による開会】

国連総会で「子どもの権利条約」が採択されてから、今年の11月20日で20周年を迎えます。しかし、条約採択から20周年が経った今でも、子どもの権利の出発点である「生きる権利」が守られず、年間880万人の5歳未満の子どもたちの命が失われています。シンポジウムの開会にあたり、WVJの片山常務理事・事務局長は、「子どもたちの命のために、私たちに何ができるか一緒に考える機会にしましょう」と会への期待を述べました。

#### 【WVアフリカ地域統括事務所保健・HIV/エイズディレクター メスフィン・ロハ博士による基調講演】



メスフィン・ロハ博士より「アフリカの子どもたちの現状とワールド・ビジョン（以下、WV）の活動」と題して基調講演を行いました。5歳未満で命を落とす世界の子どもたちのおよそ半数がアフリカの子どもたちであること、乳幼児・妊産婦いずれの死亡率もアフリカは世界で最悪であることなど、アフリカの子どもたちが直面している厳しい現実が語られました。マラリア、HIV/エイズなどの感染症が子どもたちに深刻な影響を及ぼしていることを具体的なストーリーを交えて紹介し、栄養不良、肺炎など子どもたちの命を奪っている主要因について説明しました。予防・治療が可能な要因で子どもたちが亡くなる背景には、ぜい弱な保健システム、資金不足、また慢性的な貧困、紛争、交通の困難さなど構造的な要因があることを挙げ、政策、事業実施、資金面での課題を整理しました。

WV がアフリカ 25 カ国で展開している保健対策事業では、特に母子の栄養改善と疾病予防に焦点を当て、100 万人以上のエイズ遺児や弱い立場にある子どもたちに支援を届けていることを紹介しました。多くの課題がある中で、子どもたちの命を救う取組みが成果を挙げている事を示し、「最も必要としている子どもたちやお母さんに基本的な保健サービスを届けることができるなら、もっと多くの子どもたちを救うことが可能だ」と訴えました。



ロハ博士は最後に「健康な者は希望を持つ。希望を持つ者には人生がある」というアラビア語の諺を紹介し、力強くスピーチを締めくくりました。

### 【橘高校卒業生による発表】



WVJと開発教育プログラムの実践やチャイルド・スポンサーシップによる支援を通じて関係の深い神奈川県川崎市立橘高等学校卒業生の亀岡渉さんが、同校国際科在学中に WVJ との取組みを通して学び感じたことを発表しました。

亀岡さんはクラスでチャイルド・スポンサーとなり支援していたチャイルドから返信の手紙をもらい、支援している実感が湧いたと当時を振り返りました。また、2008 年には亀岡さんの後輩たちが体験型イベント「教科書にのっていないアフリカ」スクール版を初めて開催。反響を受け

て、自分たちが学んだことを多くの人に伝えることができないかと考え、現在、川崎市との共催で市内の中高生を対象としたイベントを 12 月に開催すべく準備が進められていることも紹介しました。

現在は明治学院大学国際学部在籍し、アジアの子どもたちの教育支援活動を行っている亀岡さん。ボランティア活動において、支援をする側と援助を受ける側のニーズのギャップを感じているとのこと。「現状を知らなければ何もできない」と、開発教育の必要性を訴え、さらに「現状を知っているだけではなく、その上で何ができるかを現在模索中」と熱い思いを話しました。

これに対し、ロハ博士は「どんな支援でも小さすぎるものはない。支援において大切なことは気持ちや思いだ」と亀岡さんの発表に感動の気持ちを示しました。また、学校での学びが家庭へと広がっていくことが、「途上国の活動地域、そして日本のような国の双方で大切」と、訴えました。



## 【第 2 部】

### 【パネルディスカッション】

政府、国際機関、企業、報道など様々な立場で活躍されているパネリストをお招きし、保健分野の途上国支援のために「日本の私たちに何が出来るのか」というテーマでパネルディスカッションを行いました。WVJ の片山事務局長がファシリテーターを務め、海外事業部プログラムオフィサーもパネリストとして登壇しました。

討議では特に、様々なセクター間のパートナーシップ(連携・協働)と ODA(政府開発援助)の著しい減少傾向について議論が交わされ、「各セクターが担う役割に応じ、強みを活かして連携協力すべき」(ユニセフ/草道氏)、「セクター間のコーディネーターの価値観を皆が共有し支持することが重要」(住友化学株/水野氏)、「援助を増やしていくためには日本全体の雰囲気作りが必要」(外務省/長岡氏)、「新しい事を発掘する市民の意識、それを促すメディアの力が重要。時には慎重になりすぎない勇気が政府にも必要」(WVJ/木内)、「NGO の活動がメディアに取り上げられるにはニュースとしての価値を創出する工夫が必要」(日本経済新聞社/原田氏)などの意見が出されました。

## ◎各パネリストによる冒頭発言の主なポイント

### 国連児童基金(ユニセフ)東京事務所代表 功刀純子氏:

子どもの生存と発達を支えるユニセフの活動、成果と課題を紹介。世界第2位の援助国である日本が国際社会と連携しつつ指導的役割を果たすことに期待。経済的援助だけでなく、技術、人材育成、政策提言、子どもの参加など、日本に求められている援助方法は様々ある。

### 外務省国際協力局専門機関室長 長岡寛介氏:

日本政府の保健と開発に関するイニシアティブ、2008年の第4回アフリカ開発会議(TICADIV)、北海道洞爺湖サミットで表明した支援策などを紹介。ODA予算の減少を如何に食い止めるか、国際社会での政治的リーダーシップの発揮、日本人職員の活躍の促進などが今後の課題。

### 住友化学株式会社 ベクターコントロール事業部事業部長 水野達男氏:

住友化学によるマラリア予防の防虫蚊帳オリセツ®ネットの事業紹介。開発技術を現地企業へ無償提供し、マラリア蔓延の根絶への貢献だけでなく、現地雇用を創出。生産規模を拡大する中で半数の生産基点をアフリカに移す。蚊帳使用が浸透していないアフリカ地域でのオリセツ®ネットの普及に意欲。

### WVJ 海外事業部プログラム・オフィサー 木内真理子氏:

子どもの健康はみな支えるもの。ルワンダ、スリランカ、タンザニアの事例から、子どもは、教育、保健衛生、所得・経済など多岐にわたる環境が整って初めて健康でいられることを説明。子どもの健やかな成長を地域全体で支えるシステム構築、親への啓発活動など、きめ細やかな、かつ包括的な支援が必要。

### 日本経済新聞社編集委員 原田勝広氏:

90年代に国連本部を取材して以来の経験から、NGOの外部環境変化を説明。特に企業のCSR(企業の社会的責任)の成熟に焦点をあて、企業とNGOのパートナーシップの事例、社会起業家の登場や貧困層をターゲットとしたBOP(Bottom of Pyramid)ビジネスを紹介。

## ◎質疑応答

時間内にご紹介しきれないほど多くの質問が会場から寄せられました。政府統計の信頼性、日本の国益と国際協力の関係、欧米と日本のメディアの間で見られる国際会議やNGOの見解に対する関心の違い、日本国内の困難な状況にある子どもたちへの支援の必要性、途上国政府の説明責任やガバナンスなど多岐にわたる質問に、パネリストまたロハ博士が丁寧に答えてくださいました。アンケートの結果からも質疑応答への高い満足度がうかがえました。

## ◎パネリスト提言:「日本の私たちにできること」

### 草道氏:

ODAは失敗例ばかりが記事になるが、成功事例にも注目してほしい。また、援助によって人々が援助依存に陥るのではという指摘があるが、もっと援助を受ける人々や国際機関を信頼してほしい。

\* 功刀氏は途中ご退席され、ユニセフ東京事務所オペレーションズ・マネージャー草道裕子氏が議論にご参加くださいました。



**長岡氏:**

パートナーシップの強化によって、援助の付加価値が高まる。他の組織ができていないことに関心を持ち、焦点を当て、刺激しあうことが重要。橘高校の例のように開発教育を通して、若い世代に関心を持ってもらうことが重要。

**水野氏:**

企業も困難な問題に積極的に立ち向かい、成功事例を作っていくべき。アフリカを知り、自分の経験や体験を伝えることに時間を割くことも大切。身近な知り合いに「伝える」という活動は、誰にでもできる支援の方法なのではないか。

**木内氏:**

日本の顔が見える援助は重要。同時に、途上国の子どもと関わりをもつことによって、相手の顔を見ることも大切。誰もががかつては子ども。「子どもの健康」は実は身近な問題。日本でできることは何か。一人一人が発信してほしい。

**原田氏:**

現代は「共感の時代」。アフリカでの問題がより身近に感じられるはず。NGO と企業のパートナーシップは重要。企業が現地に精通した NGO と協力することで、より多くの支援を届けることが可能となる。企業は倫理や勤勉の精神で成功してきた。それは NGO の活動と通じるものではないか。

**終わりに:**

議論の締めくくりにあたり、片山事務局長は「市民一人一人が“できる！”という意識を持って作り上げていく市民社会へと成長していきたい」と抱負を語りました

**【予告:「Child Health Now - アクション！ 救えるはずの命のために」】**

司会者より、ワールド・ビジョンが 2009 年 11 月 16 日より始める新たな取組み「Child Health Now - アクション！ 救えるはずの命のために」をご案内しました。ミレニアム開発目標達成の期限である 2015 年に向けて、世界のワールド・ビジョンが連携して保健、栄養、水・衛生など子どもたちの命に直結する活動を拡充していくとともに、子どもたちを救うことを求める市民の声を、世界の政策決定者に届けていきます。今日の議論で様々な分野の力を集結して取組めば、もっと多くの子どもたちを救うことができると共有されたことを受けて、皆さまのご協力を呼びかけました。

※詳細はWVJ ウェブページ <http://www.worldvision.jp/childhealth/> をご覧ください



**当日アンケートにお寄せいただいた声**

たくさんのご意見をありがとうございました。一部をご紹介します。

- パネルディスカッションでは、色々な視点から話を聞くことができ有意義だった。
- 自分に何ができるのかを考える良いきっかけになった。
- 日本の ODA の低さに驚きました。
- 市民がもっと声を上げていかなければならないと感じました。

**特定非営利活動法人ワールド・ビジョン・ジャパン**

電話: 03-3367-7253 FAX: 03-3367-7652 Eメール: [advocacy@worldvision.or.jp](mailto:advocacy@worldvision.or.jp)

[www.worldvision.or.jp](http://www.worldvision.or.jp)

